カナヘビの事ども

竹中 践

1937年の「トカゲの事ども」という短報にニホントカゲの繁殖行動が記されている（小島、1937）。当時は、カナヘビ（ニホンカナヘビ）の習性について若干の報告はあるものの、ニホントカゲについては、再生尾の報告があるといった程度のようである。この短い報告の中で、飼育下でオスがメスの頸部にかみついてから交尾行動に入るだけでなく、オスがオスにかみつくことやカナヘビのメスを入れてもかみつくことが述べられている。また、飼育箱の土中で互いに体を接しあっていることや脱皮が土中で行われることなどが述べられている。これらの観察は、現在ニホントカゲの行動を考える上で参考になると思われるが、断片的な観察の記録でも、残しておくことが大切であることを示す、よい例であると思われる。

この報告では、筆者がこれまでにカナヘビ類を採集、飼育してきた中で観察したことを記述しようと思う。また、カナヘビ類の記録以外でも、分布に関して記しておいたほうがよいと思われることを若干記述する。なお、市町村名は当時の記録のものである。

・1978年6月5日　三重県桑名において

ニホンカナヘビの成体オスが成体メスの尾基部をかんでいた。互いに歩調を合わせて3,4秒に1歩のペースでゆっくりと、50cm程度の円を描くように行進していた。10:30頃から観察を始め、数周行進するあいだにオスは次第にかむ位置を腹部のほうに移していき、10:38に突然、尾をからませるようにして交尾体勢に入った。両者をナイロン製の袋にそのまま移しても交尾は続き、10:54に離れた。見られた場所はミカン畑のわきのわらのかたまりにやや隠れるような位置で、当日の天候は晴れ、観察時の気温は23℃であった。メスの頭胴長は52㎜、オスは56㎜であった。

・1978年4月12日　鹿児島県牧園町において

嘉例川の駅から宿に向かう途中、小雨であったが探索した。耕作前の水田のわきの一段高くなったところにわらが積んであり、トタン板がかぶせてあった。そのわらの中の乾燥している部分にニホンカナヘビが2個体並んでいた。気温は15.5℃であったが、カナヘビがいた場所は17.5℃であった。春先ではあったが、冬眠の時期ではないので肌寒い雨を避けていたのであろう。個体はオス（頭胴長40㎜）とメス（同45mm）で、1歳（1冬越）と思われるが、両個体の関係は不明である。

・1978年5月16日　東京都高尾において

林道のわきの草むらにニホンカナヘビ2個体がきわめて接近した位置にいた。16:10。オス（頭胴長48㎜）とメス（同45mm）で、2個体とも1歳である。

・1977年5月24日　東京都高尾において

沢の岸の杉枝の積み重ねでニホンカナヘビ2個体が同じ所にいた。11:45、気温20.0℃。オス（頭胴長63mm）とメス（同64mm）で、2個体とも2歳以上の成体である。

同じく、2個体がススキの草むらの同じ所にいた。メスは13:10に捕獲し、頭胴長65mm、腹内に5卵存在することが触診でわかった。オスはいったん逃げたが、14:10に捕獲し、

同67mm、両方とも2歳以上と思われる。

・1977年4月20日　東京都高尾において

林道わきの枯れススキの上で2個体がからみあっていた。接近すると離れたが、捕獲すると2個体ともオスであった。16:20。一方は頭胴長63mm、他方は同58mmであった。前者には尾基部にうすいかみ跡が1つあり、後者には尾基部に多数のかみ跡と左脇にもかみ跡が1つあった。

上記の高尾の記録は、高尾山と国道20号線を挟んで南側の梅ノ木、込縄といった地名の丘陵地において行ったニホンカナヘビの標識・再捕獲調査の中で観察されたことである。同調査においてそのコースと浅川および周辺の水田地域において記録された他種を列記しておく。

1977年4月2日：アズマヒキガエル卵、タゴガエル鳴き声、4月11日：アズマヒキガエル卵、タゴガエル卵、ニホントカゲ、ヤマカガシ、4月20日：カジカガエル鳴き声、ニホントカゲ成体、幼体、ヤマカガシ、5月11日：ニホントカゲ成体メスとオス、ヤマカガシ、5月13日：アオダイショウ、ヤマカガシ（胃内にヒキガエル）、5月16日：シュレーゲルアオガエル抱接（水田に水入る）、シマヘビ、ヤマカガシ、5月21日：シマヘビ成体、幼体、6月21日：トウキョウダルマガエル鳴き声、カジカガエル鳴き声、アオダイショウ、ヤマカガシ、7月19日：アカハライモリ、トウキョウダルマガエル幼体、シュレーゲルアオガエル、シマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ、ヒバカリ、シロマダラ、8月12日：ヤマアカガエル、トウキョウダルマガエル、ニホンアマガエル、シュレーゲルアオガエル、アオダイショウ、ヤマカガシ。1978年4月26日：ニホントカゲ、ヤマカガシ、ジムグリ、5月5日：ニホントカゲオス成体（頭胴長62mm）、メス成体（同81mm）、5月16日：ニホントカゲ、アオダイショウ、ヤマカガシ（胃内にアカガエル）、5月18日：シュレーゲルアオガエル、タカチホヘビ幼体轢死体、5月21日：ヤマアカガエル亜成体、シュレーゲルアオガエル鳴き声、カジカガエル鳴き声、ニホントカゲ、ヤマカガシ(頭胴長105.5cm、尾長25.5cm、体重約900g)。1979年5月5日：ニホントカゲ、ジムグリ亜成体、ヤマカガシ亜成体、5月9日：ニホントカゲ幼体、オス成体、ジムグリ成体、ヤマカガシ大型個体、5月13日：カジカガエル鳴き声、アオダイショウ亜成体、ヤマカガシ亜成体、5月15日：ヤマカガシ、10月21日：ヤマカガシ。1980年4月4日：タゴガエル鳴き声。

・1978年4月7日～4月10日　鹿児島県屋久島において

永田の村落周辺において、ニホンカナヘビを片方の手で2個体捕獲した。オス（頭胴長55mm）とメス（同52mm）で、ともに腹面はのどから下腹部まで全体が真っ白の色彩タイプであった。ちなみに屋久島では、腹面の前方が白くて後方が黄色といった色彩タイプだけでなく、全体が濃い黄色や全体が真っ白といったタイプがいる。

この年代にはニホンカナヘビは島内のいたるところでみられ、村落周辺の畑や水田、果樹園といった耕作地周辺でも採集することは簡単で、4月7日には14:30-17:00のあいだに18個体を採集している。また、宮之浦港の海岸堤付近の草むらにおいて1個体を採集しているが、同所では1977年6月5日にも2個体採集している。そのうちのオスの1個体は頭胴長66mm、尾長199mmで相当に長い個体であった。ちなみに、メスは6月2日に永田で捕獲した頭胴長65mm、尾長180mmが捕獲した中でもっとも長い。もっとも、長谷川雅美氏らと調査した東京都の神津島ではオスが頭胴長68mm、尾長202mm、メス

が頭胴長 72mm、尾長 188mm という個体を採集しているので、屋久島の個体がもっとも長いというわけではない。

・1977 年 6 月 12 日～6 月 13 日　長崎県対馬上対馬において

6 月 12 日 11:30 に道路脇の斜面に出ている木の枝にアムールカナヘビがいた。人の気配に気づいて枝から下に落ちてから斜面を上り崖の上部の隙間に隠れようとした。この個体はメスで頭胴長 78mm、尾長 181mm と、かなり大型の個体であった。

6 月 13 日 12:30 に小さな川のわきの斜面の崖上に切って積まれた木の上でアムールカナヘビが日光浴していた。人の気配に気づいて、木から下り、斜面の途中まで下って石が積み重なったようになっている崖の隙間に入って隠れた。この個体はメスで頭胴長 65mm、尾は切れてしまった。その後、6 月 29 日に飼育下で 4 卵産んだ。深さ 4cm の容器の底部の土中に 3 卵産み、表面近くに 1 卵産んであった。あたかも 1 卵を下の 3 卵を守る犠牲のような雰囲気ではあったが、その後 7 月 16 日に産卵したときには 3 卵産んで、3 卵とも底部であった。底に産卵したということはもっと深く産む可能性があるということであろう。

ニホンカナヘビでは一般的には石や落ち枝などの下の土表面に浅く産卵するが、土を掘って産むことはニホンカナヘビでもみられる。1977 年 7 月 13 日に東京都青梅市軍畑において捕獲したメス個体（頭胴長 60mm）が 7 月 15 日に上記と同様の土を入れた容器の底部に 4 卵産んだ。この例では産卵中のところを見ることができ、下半身が土中に入った状態で産卵していた。

・1976 年 3 月 25 日～3 月 28 日　沖縄県大里において

今はアオカナヘビをサトウキビ畑で見かけるということはあまりなくなったが、以前は普通に見られた。当時はあまりに多く生息していたので、いちいち採集場所や目撃地点を詳細に記録してはいなかったが、ある程度の記録はある。大里の仲程と当間の辺りで採集した際に、人家や空き地周辺とサトウキビ畑で採集記録を分けていた。なお、3 月 25 日は特に採集場所の記録はなく 50 個体を採集している。26 日はサトウキビ畑主体の範囲で 14 個体、空き地などで 9 個体、その他に与那原に向かって歩いた途中で 12 個体採集した。27 日は与那原からの途中で 15 個体、仲程の空き地などで 4 個体、当間の主にサトウキビ畑の場所で 13 個体、28 日は空き地などで 9 個体、主にサトウキビ畑で 27 個体となっている。つまり、この頃はサトウキビ畑で多数の生息がみられたのであった。サトウキビ畑において、片方の手で 2 個体捕獲し、近くにいた個体をもう一方の手で捕獲したといったこともあった。

・1999 年 6 月 13 日　沖縄県大里において

そのような状況から 20 年以上経過するに至ってアオカナヘビの生息数は減少した。14:00 頃から同じ地域を調査したが、15:30 頃までに針葉樹の茂みでキノボリトカゲ 1 個体を見ただけであった。当間のゲートボール場にいたおじいさんに聞いてみた。「ソージャマヤー（アオカナヘビの地元の呼び名のひとつ）は、最近はたまに草むらで見る程度になった。ジューミー（アオカナヘビの呼び名のひとつだが、このおじいさんはキノボリトカゲのことをそう呼んでいた）はガジュマルに時々登っている。ソージャマヤーは除草剤を撒いてかかると死ぬし、逃げても 2、3 日効果がある間に悪影響があるのではないか。各家庭の庭やキビ畑のまわりでみんな撒いている」、このように話していた。この後、アオカ

ナヘビを住宅空き地の草むらで4個体記録し、夜間に3個体記録したが、非常に少なくなったのは確かであった。

当時、除草剤によってアオカナヘビが死ぬということについて、調べることをしなかったが、調べてみると、1970年代頃から、除草剤としてきわめて毒性の高いパラコートが使用され、しかも登録当初は無味無臭で販売されていたということがわかった。植物葉上の露滴を摂取することが多いカナヘビ類にとって、大変危険な薬剤が使用されていたという可能性がある。その後、パラコートは人の死亡事故などが多発し、忌避臭などが添加されるようになったようではある。

・2000年3月28日　大里において

同じ地域で09:30頃から2時間で、畑の跡地の草むらでアオカナヘビ15個体以上を記録しているので、調査時点の状況による確認数の変動はある程度はあると思われる。

・1976年4月26日　広島県向島において

広島県尾道市と海を挟んで向島がある。その瀬戸内海側に広島大学の臨海実験所があり、平野義明氏（現在は東京大学安房小湊の実験所）に手こぎ船で上江府島と下江府島に渡していただき調査した。向島ではニホンカナヘビとニホントカゲを採集できたが、この小さな無人島ではニホントカゲしか見られなかった（タワヤモリはいた）。下江府島ではニホントカゲを測定しており体鱗列数を数えてあった。オスが24列2個体、26列6個体、メスが24列2個体、26列4個体、幼体が24列1個体、26列3個体で、合計は24列5個体、26列13個体であった。捕獲した中で最大頭胴長はオスが82mm、メスが80mmであった。なお、上江府島で捕獲した1個体（オスで頭胴長84mm）は標本としたが、下江府島では捕獲個体が多かったので指切りマークして放逐した。しかし、再びその島を訪れるということはなかった。

・1976年5月26日北海道江差において

江差町には砂州と防波堤でつながったカモメ島という小さな島がある。その断崖付近にはニホンカナヘビ、島の中央の神社周辺にはニホントカゲとアオダイショウが生息していた。この時に採集したニホントカゲ5個体のうち4個体の測定記録は、すべてオスで、体鱗列数がすべて26列、頭胴長は65-78mmであった。その後もたびたび訪れてはいたが、2010年6月18日に訪れたところ、島の大部分が芝生になっており、神社周辺もすべて芝生で被われていてトカゲやヘビが生息できそうにない状況になっていた。

・1999年8月7日～8月8日　東京都新宿区下戸塚坂および戸山公園において

8月7日に下戸塚坂に面した自衛隊官舎跡の草むらにおいて、ニホントカゲの成体1個体と幼体2個体を記録した。坂道に面して石垣となっていたので生息環境として適していた。2001年4月1日には同所でニホンカナヘビ1個体を記録したが、その後マンションが建設され、生息環境は消失した。

8月8日には戸山公園に面した戸山教会跡の藪でニホンカナヘビ幼体1個体を記録した。ここの近くの通称「箱根山」という小さな山にはニホンカナヘビが多く生息していたが、人の踏み固めなどの影響で次第に減少していった。1970年代までは、戸山教会の前と他に1カ所、防火用水池があった。そこはヒキガエルの繁殖場所となっていて住宅地のあちらこちらから早春にヒキガエルが集まってきたものである。教会が閉鎖され、その後用水池が埋め立てられ、繁殖場所を失ったヒキガエルが卵を産み漏らすといった光景があった。

1970年代後半にはもう1カ所の用水池も埋め立てられた。おそらくは子供の事故防止ということであろうが、かつてはあちらこちらに深さ1mほどのコンクリートの防火用水池があり、トンボや水生昆虫の生息場所となっていた。ところでその後、公園が整備され、少し離れた所に人工せせらぎが造られ、その池でヒキガエルの繁殖が見られるようになった。この人工せせらぎの場所は、学習院女子高等科の塀の外側に位置し、1960年代には塀の内側から自然の沢が流れていて、森と草むらも残っていて、ニホンカナヘビやニホントカゲだけでなく、シマヘビもいた。

また、アオダイショウはこの地域でもっと広範に見られ、近くにあった東戸山中学校では1964年の夏に大きなアオダイショウが石垣で目撃され、休み時間に先を競って出てくるのを見回ったが、結局私が捕獲した。その後、飼育箱の釘を抜いて板をはずして逃走してしまった。同じ頃、校舎裏の花壇わきの鉢の下でヒバカリの幼体が見つかり、今は干からびた「標本」となっている。1975年頃に近くの子供が、都電が通る道路に面した石垣の近くでシロマダラの幼体の死体を拾ってきたということもあった。抜弁天から新宿に都電が下っていくあたりと聞いたと記憶している。

引用文献

小島貞男（1937）トカゲの事ども．博物學雑誌 35（60）179-180.